

# 暮春挿話

佐藤春夫

發表 『改造』 大正十三年四月號

初演 昭和七年四月（於飛行館）

築地座（演出）

彼——三十の青年紳士

彼女——十八九の、令嬢のやうなあどけない夫人。——彼の新妻

老紳士——異様な人物、五十五ぐらゐる？ 白髪

ホテルのボーイ

自動車運轉手

同じく助手

海岸の小都會、有名な避寒地、第一流のホテル。

扉を兩方に開け放した大きなケースメント。その奥のバルコン——がつしりした唐草模様の鐵細工で圍まれてゐる。手すりの色は黒である。海の遠い水平線が手すりの上三寸ばかりのところまで現はれてゐる。手すりの模様の隙間からも、無論海の色がのぞき出てゐる。四月末ののどかな、淡いすみれ色の空。

ケースメントの外は明るい午後二時ごろの日ざしで、灰色の床にもものゝ影は映じ出される。バルコンの正面、手すりにすれ／＼のところに小さな卓が一臺。その卓の三方から椅子が三脚。

一脚は海に面し、他の向ひ合つてゐる二脚のその一脚には、まだ極く若い——十八九の令嬢のやうにあどけない夫人。

(彼女)

が、日光をうしろからうけて、ひとりで、白い毛絲の編みものをしてゐる。その毛絲の玉を着物の袂に入れてあるので、袂がぶらぶらしてゐる——そんなことが彼女をあどけなくしてゐる。二本の長い編み棒で彼女は丹念に編んでゐる。

そこへ

(彼)

が、ケースメントの内側に僅にある廊下——ケースメントの手前をそれに沿つて左右に通

ず——の右から出てくる。黒の上衣縞ズボン申分ない服装。スツキリした三十の紳士。片手にフランスとちの本をもつて。ケースメントを抜けてバルコンへ出る。  
彼女に對して腰かけながら、

彼 もうさつそく始めてるね。(笑顔) そんなものを丹念にこしらへて見たつて、日本のハイカラにはなれるだらうけれど、よそへ行つて何にもなりやしないのに。

彼女 (笑顔) さうでせうねえ。

彼 ほうい！ また負けたか——いつもその手でやられるのだが、柳に風だね。あなたには全く學ぶべきだよ。外交の祕法をのみ込んでいらつしやる——軽く受けながして置いてその間にどんな實行して行くのだから。(笑)

彼女 だつて私、もうせんからこんなことをしなれてゐるのでせう。何もせずにもゐると手もちぶさたなのですよ。だから出来上つたらまたほぐしてしまつて、また編み直してもいゝのよ。(少しほどく)

彼 ぢや、それでもう解きほぐしてしまふの？

彼女 (笑) え！

彼 これはまたひどく反抗的だな。(笑顔)

彼女 ……うそよ。間違つてゐたのですもの。

彼 僕が邪魔をしたものだから。

彼女 さう！

彼 どうれ、僕もあなたの邪魔なぞをして嫌はれるより、……（一たん卓上に置いてあつた書物  
をとり上げる、海の方をちらと見て）——ほんたうに静かだなあ。

彼女 （海の方を見る）

彼は書物をひろげ、それを片手にもつて読み始める。

彼女はやはり先刻からのつゞきを編んでゐる。

間。

この間に、

（ボーイ）

が、金ボタンの澤山ついた制服をつけて、廊下を右から現れて慇懃に歩調正しくし、足音なく左に通りに去る。間もなく再び左から出て来て、同じ歩調で、ただ胸のところ、両側の時計を開けてそれを見ながら右へ通り去る。機械的、バルコンとは全く関係のない動作。

彼女 （編みながら）あなた。

彼 （読みながら）何？

彼女 少しお話をなさらない？ それとも御本がおもしろい？

彼 いゝや。御本はあんまり面白くない——たゞね（笑）もうせんからかういふ癖でね、何も讀まずにゐると手もちぶさたなのですよ。

彼女 あら！（上目で見て）直ぐと私をおからかひになる。

……私ね、あなた、一度お嫁に貰はれたことがあつたのですよ。

彼 いつ？（本を卓上に置いて稍眞面目に）今までそんなことはなかつたと、あなたは言つたのにな？

彼女 いゝえ。——本當にではないの。冗談……

彼 冗談にお嫁に貰はれた？

彼女 ——でもね。皆さんがさう言つて私をからかふのでせう。

彼 いつのことなの。それは？

彼女 もうずつと先——さうね（數へるやうに心持頭を動かして）七年も前ですわ。女學校の二年の時だから……

彼 へえ？

彼女 それがね、あなた。どんな人だと思ひ遊ばす？

彼 知らない——解らない。

彼女 お爺さんよ！ それも妙なお爺さん。

あら、編むのをやめて）もう毛糸が無くなったか知ら……

彼 —— 部屋へ行つて取つて来て上げようか。

彼女 いゝのですわ——ありがたう。持つて来てありましたの、（編物を卓上に置いて）もう無くなるかと思つて。そら……（別の袂から束を出す）ぢや、おそれ入りますが、これがかういふ風に（仕方）持つてゐて下さらない？

彼 巻いて上げようよ——あなた、そのまゝで持つておいで。

彼女 （糸口をさがし出して彼に渡しかける。直ぐ思ひかへしてひつ込める）あなた持つて下さいますよ（笑顔。押しつけるやうに束を差し出す）——あなたが、お巻きになれば、きつと固すぎるか柔かすぎますわ。

彼 （束を受取る）そんなむづかしいものなの。

彼女 え、かげんがありますわ。

彼 （束を両手にかけて）これでいい？

彼女 え。すみません。（巻き始める）

彼 （両手を無器用に動かす）それで、今の話はどうした。そのお爺さんは！

以下、彼女は巻きながら。

彼は両手を動かしながら。

彼女 その方がね、それは妙な。様子も不思議な方だけれど、学校のひける時刻に二日もつづいて門のところ立ってゐたの。三日目にはたうとう學校へいらつしたわ。私のゐる教室へ。それからそのお爺さんが先生に何か小さな聲でお話をなすつたと思つたら、先生が私の名をお呼びになつたの。——何でもないので。私に讀本をお讀ませになつただけなのですが、——國語の時間でした。あそここのところ——「田舎と都會」といふ章のおしまひ、今でもよく覚えてゐますわ——（自然と讀む口調で）「心きよき田園の人々、よし寫し得ず詠し得ずとも、その身こそは月花とともに、やがて繪なれ歌れ。」と言ふの。ね、よく覚えてゐるでせう。二學期の半ごろだわ。そのお爺さんは暫く參觀をして出て行つておしまひになつたわ。それが一ばんおしまひの時間だつたでせう。わたし、歸らうと思つて何げなく門を出ると、そのお爺さんが、やつぱり、その日も、門のところ立つてゐるのよ。わたしほんたうにびつくりしたわ。だつてその方が妙に私に口をお利きになるのぢやないか、つてそんな氣がしたのでせう。だものだから、私はお友だちの陰になつて急いで歩いたの。もう大分來たと思つて振り向いてみると、どうでせう、やつぱりその方は立っていらつしやるの——私の方を見ながらよ。その明る日、彼 また來たの？

彼女 いゝえ。もうそれつきり——でもね、皆さんがおからかひになるのでせう——でも上の級になると時々、そんな風にお嫁さんを見に來る方があるのでせう。それをきつと寄宿舎の方が

上の級の方々から聞いて来たのでせう。わたしきまりが悪かつたわ。それだのに皆さんが、それや面白がつておからかひになるの。あんまり同じことをおつしやるものだから私、氣がふさいでしまつたわ。何だかもう學校へ行くのがいやになつたくらゐ。——をかしいわね。ほんたうに赤ちやんよ。おうちへ歸つてもね、私の様子が變つてゐたのでせう、お母さまが「どうかしたの。」とおたづねになつたことよ——大變御心配のやうに、私、困つたわ。——ほんたうよ。彼 その話はおうちではしなかつたの？

彼女 えゝ、だつてその日すぐ言つてしまはなかつたでせう。へんに言はないでしまつたの。だものだから、言ひそびれてしまつて、——それに、皆さんがそんなことを言つておからかひになるなんて、お母さまに言ふのはきまりが悪いでせう。

彼 うん。——一たい、どんなお爺さんだらうな。

彼女 さうね。それや變つてゐる方。ちよつと見ると西洋人のやうな……

彼 西洋人——西洋人にはそんな變つた人もゐさうだな。

彼女 ところがね。西洋人ではないのですのよ。

彼 ふむ。お爺さんつて一たい幾つぐらゐ？

彼女 それがね、さあ幾つぐらゐでせう。子供だつたからよつぽどのお爺さんのやうに思つたけれど四十位だつたかしら。もつと年とつてゐたかしら。五十位？ さうね、やつぱりわからないわ。——さうさうきつと五十位ですわ。あ、さうだ、教室へ這入つていらした時髪が眞白



でしたもの。痩せて、いくらか怖いやうで——でも、今考へると上品な……

ピアノの音がする、この建物のどこかやゝ遠いところから——滞在客の手すさびらしいまづい弾き方。ありふれた曲。

突然、バルコンへ、——廊下からでなく、ケースメントを通らず——ぢかにバルコンの上へ、白髪の、

(老紳士)

が来る——左から。彼女が今話してゐたと全く同じ形の人。横顔。茶の格子縞の旅行服を着てゐる。慚羞と驕慢とが相半したとても言ふ異様な物腰。身邊には何か特別の空気をもつてゐて、その人が来ると舞臺の調子が徐ろに一變する。彼女のうしろから卓の方へ進む。

彼 (老紳士を訝しげに見る。毛絲の束を手から卓上に置く。目を上げて彼女に) ……

彼女 (彼の無言の話を解せず。——巻く手をやめて) あなた、どうなすつたの。もうおくれたびれになつて。もうほんの少しのところですよに……

老紳士 (進みよりながら、呟く) あまり不意だらう……

彼女 (ふりかへる)? (軽い驚き。手の毛絲のたまを卓上へ無意識に置く。毛絲のたまは投げるやうに置かれたので、卓上をころがつて、卓の端から手すりを越えて落ちる——下へ。——

見えない地面へ。)

老紳士 (眩きつづける) 驚いたらう……

彼女 (彼に) あなた! (夢にうなされた人の低い聲に似てゐる)

老紳士 (眩き) もつと驚くことだらう……

(彼と彼女に會釋する) さぞびつくりなさるでせう。——突然で。(海に面した椅子を指しながら) 私をここへ暫らく坐らしてくださいさるでせう? (彼等に關はずに腰を下す——後姿となる)

彼 あなたはどなたです!

老紳士 (彼を軽く手で制しただけで、それには答へずに) 私はいつかあなたたちを愕かさなけれやならなかつた者です。(彼女に) これ、私だらう。——私を覚えてゐるでせう……

彼 (起立)

老紳士 (一切相手には關はずに。この人の聲は明晰で、しかし低く重く——抑揚のあまりない調子でいつも獨語に近い口調、時々目の前の相手をはつきり意識する。彼女に——) 七年前にお前のところへ現れた時、私はほんのさん、た、ま、ん、た、り、ず、む、だ、つ、た。今日は一つの眞實ですよ。——私は眞實を言はなげやならない。あなたは眞實を聞かなげやならない。——それだけにお前が怖れるのも無理ではない。

よね子、——よね子さんといふ名だね。——あの時、學校で聞いて覺えたが……

彼 さうです。——あなたは何か御用ですか。——あれは私の妻です。

老紳士 さうですとも。さうですとも。それを私が知らないでなるものですか。

——あなたは、あれに似つかはしい夫だ、と私は見てゐる。信じてゐる。

まああなたもそこへおかけ。何でもないのでから。あなたがたをびつくりさせて本當にすまない。

だが、いつかは一度びつくりさせなけやならなかつた。その時が今だつたまでだ。

——よね子さん、——私がつけたかつたやうな名ぢやないが、そんなことはどうでもいゝ。

彼女 あなた。(夢にうなされた人のやゝ高い聲に似てゐる)

彼 ……

老紳士 ——いゝのだよ。ねえ！ よね子。

——私はお前のお父さんだよ。——信じられまい。——あたりまへだ。——お前は生れたその日から嘘に慣らされてきた。

お前ひとりではない。たくさんの人が、いや、人間は今までのところでは、皆、みんなではないまでも大方、嘘の方に慣れてゐる。

突然、かうして本當が目の前へ来て坐つても容易には誰も信じまい。解るまい。

だが、今に追々とわかる。後になるほどもつとわかる。——私は疑はないのだよ。沁みとほる。どこまでも沁みとほる。——それが眞實といふものの力なのだから。

——ね、よね子、私はお前のお父さんだよ。本當のお父さんだよ。——この一言が言ひたかつ

ただけだ。私はお前たちのあとをつけまはしてゐた。—— たつた一言いひたい爲めさ。

彼 (腰を下す)

老紳士 (彼女に) 私はお前がいゝ夫を持ったことは新聞で知つたよ。あなたたちはイギリス大使の夜會で知り合つたのだね。私はそれを新聞で知つてから……

新聞は賑やかに書いてあつたね。(彼に) あなたはいつ任地へ—— たしか羅馬だといひましたね—— いつ羅馬にお立ちになるのです。—— もうすぐ近いうちだといふが。

彼 (曖昧に) ええ。—— 何ならば、(彼女に) よね子、部屋へ行かうではないか。(老紳士に) あなたもそこでお話下さいませんか。

老紳士 いや。私はもう直ぐ失禮する。ここでいいではありませんか。

—— この建物の二階には、あなたたちと私とより誰もゐない。それに本當の話は誰が聞いてもいいものです。…… 私は新聞でみた。あなたたちは羅馬へ行く。私はあなたたちの行かない前に自分の娘に、一言、本當を言ひたかつた。でも、私はもういつ死ぬかも知れない。—— 私にはさう年寄りではないが、でももう疲れてゐる。

—— あなた方はさつき私の年のことを言つてゐたやうだったが、私は、—— この娘は私が三十四の時に生れた。あの女—— この子の母はあの時二十七だつた。私の今の年は、だから、あの子の年に三十三を加へたものだ。—— 私も、時々、自分の年を思ひ出さうとする時にはいつもさうして數へるのだ。

——私はもう大ぶん長いこと自分の年を數へもしないが。でもあの子の年ならば、いつだつても知つてゐる。(目の前の彼女を見て) 今年は二十だね。

彼女 (目を可憐に見ひらく、無心のうちに大きくあどけなく頷づく)

老紳士 (うれしげに) ほう、お前は私には似ないでお母さんに似てゐるよ。今のやうになづくところなどはそつくりだよ。

——私などには似ないでもいい。お母さんに似ておくれ。

……あれは珍しい人だつた。

……あの男はあの女のことを、時々、馬鹿だと言つてゐたつげが。

——さう、單純ではあつた。だが、あれこそ、眞實をすぐに見てとる人だつた。眞實に對して答へることを知つてゐた。

——ただ弱かつたのだ。いやあれだけではない。私の方がもつと弱かつたかも知れない。

——私が死なうとさへ言へば、あの一時ときに、あの女も死んだのだ。

——さうすれば、よね子、お前はこの世には無かつたのだ。

無かつた方が幸福だなどと、お前、思はないだらう。思つてはいけない。これからさきでも、いつでも。

——私でさへも絲のやうな生をでも生きたかつたではないか。

——生きて來たではないか。

——生きてよかつたではないか。

(彼に向ひ) この子がお父さんと呼んでゐるのは、ただこの子のお母さんの夫ですよ。

——それから私の友達だつた——いや、今でも時々は友達だ。あの男にだけ言ひたい楽しい話題がいつも澤山あるのだもの。

ただね、その男は夫としては、或る時、あまり妻を愛しなかつたものですよ……。

——あなたにもわかるでせうが、同情は愛になるし、信頼も愛になるものです。

——あの女は本當に、私の妻になるべきだつた。その前に、間違つて、あの男と結婚してしまつてゐたのですねえ。

あの男はよね子が私の娘だといふことは知つてゐるのです。あの女と私とがあの男の前ではつきりと言つたのだから。しかし、その事を知ると直ぐにあの男は急に自分の妻がよくなつたのですね。私に信頼しきつてゐるあの女を、ほんたうにいぢらしいと思つたのでせう。そのいぢらしさをあの男自身に盡させたくなつたのです。さうだ、その氣持も本當だ。あの時のあの女を見て誰だつて心を動かさずにはゐないだらう。

——あの男は強い男ですよ——女を捨てるなら捨てるでせうが、奪はれるのはいやだつたのですよ。

——ああいふ性格を私はその後いつも愛してゐる。——私が彼によね子をのこして置いたよりも、彼が私によね子をのこされた方が、きつと、もつと傷ましかつたに違ひない——それを彼

は堪へてゐる。ただあれほどの人間が、どうしてさう世の中を、世の中の嘘の約束を重く見たがるだらう。

いや、世の中へは黙つてゐてもいゝ。それを知らす必要はないかも知れない。

だが（彼に）あなたには何か話しましたか。その事を、よね子の事を、あなたの妻たるべき娘の誕生のことを。

彼  
………

老紳士（言はんとする彼を待たずに）さうだらうと思つた。それがあの男のやり方だ。おかしから變つてはゐないのだ。

あなたが外交官だといふことをあの男は喜んだだらう——いつも外國にゐる人なら、何も知れまいと思つて。彼のさういふ態度が——それだけが、私の敵だ。なぜ、あの男は眞實をあなたに言はないのだ。事の初めに嘘があつてはならないのを——あの男は知りすぎるほど知つた筈ではなかつたか。

——なぜまた、あの女が言はないのだ。あの男が言はせないのだ。

——私をどこまで埋もれたものにするつもりだらう。

——私はあなたにも知つていただきたい、今あなたがそのやうに愛してゐられるよね子の父は私だといふことを。この好い子の父は私だよ。その名譽をあなたから私に受けさせてもらひ度い。世に時めいてゐる人がよね子の父ではない。

私こそ——この妙な男こそよね子の父ですよ。

——さう聞いて、萬々一、あなたの氣持が變るやうなら、よね子を私にかへして下さい。私にかへして下さい。

彼（呆然たるうちに不安と微かな恐怖）よね子を私から取り返さうと思つてあなたは御出になつたのですね。

老紳士 よね子はそのやうに生れて來て私の娘であることが、何の恥でせう。誰の罪でせう。罪も恥も、あの女にない。あの男にもない。私にもない。況んや、よね子にあらう道理はない。ただ間違ひは、眞實が今まで匿されてゐたといふだけの事だ——だからこそ、私はそれを告げに來た。

この外には、誰に罪もない。誰に恥もない。ただみんなの不運ではあつたかも知れない。——もう、私はさうも思ひはしないが。だが、今になつて一番悲しいのはきつと（彼女に）お前だらう。

しかし（彼に）あなたが本當にあの子を愛してくれるなら、今日からはきつと、あの子をもつと可愛く思ふでせう。悲しみを持つてゐる女をこそ一しほいとしい氣になるものだから。——少くとも私はさうだつた。——よね子の悲しみをあなたは支へてやるでせう。

よね子！

彼女（顔を上げて老紳士を見る——凝結した表情——放心した大きな瞳）……



老紳士　悲しみが今にお前の心へ沁み入るだらう。何も知らないお前の心を亂すのを宥しておく  
れ。

もう年をとつた私が、またいつ逢ふか判らないお前に、私の生涯の遺産をおくるのだ——お前  
の父の一つの眞實をね。

悲しくとも、お前はそれをいつかは知らなければならなかつたのだ。生きるといふことは自分  
に就ての何ごとでも知ることさ。すべての眞實を知らなければいけない。興へられただけで、  
それを知らないでしまつては生は一つの夢だ。

解からなければ無意味な謎だ。それぞれの人にはみんな一つづつの謎がある。知つただけで解  
からなければ悲しみだ。

——私のいふことが判るか知ら。しどろもどろで、とりとめもない。

——いつもひとりである人間はひとりぎめの事より外には言へない。

——ともかくも、私は知らせてお前を悲しませる。

それを悲しく思はなくなるのがお前のつとめだ。

お前の悲しみをきつとお前の夫が分けて背負うてくれる。

私も亦、同じやうにしよう。私はお前の心持をよく了解するよ。

二十年の間お前が私の心のなかで育つて來たやうに、今度は私がお前の心のなかで老いて行く  
だらう。それが私にはどんなに楽しいか。

——お前、私を、お前の心に住ましてくれらう？ 私は疑はない。私とあの女との娘であるお前は喜んで、それだけのことをさせてくれるに違ひない。

私はそれでもう充分なのだ。だから、お前は私を何も氣の毒に思ひ出すことはないよ。

私は幸福だよ——尠くとも今、この一時の私は。

——誰がこの一時の私のやうに生きてゐるものか。この一時を味ふために私の孤獨な二十年は必要だつた。しかもそのさびしい二十年の間、お前こそ私の希望であつた。

その希望は今、遂げられた。

今日まで、そばにゐなかつたお前が私をあれほどに慰めたやうに、今日から後もお前は私を慰めるだらう。

——まあ考へてごらん。二十年の間、お前のお母さんのそばに私がゐて、お前が私の膝の上で大きくなつたとしたら——それが世間の幸福といふものだらうが。さういふ幸福のなかには、私が今感じてゐるこの天地に相通ずるやうなこんな一時は果してあるだらうか！ 世間の幸福も、この一時を水にうすめて二十年にまくばつただけの事だらうよ。

——幸福は世間の人々には世間の人々らしく、私には私らしく與へられた。誰も幸福も不幸もない。

お前に與へるこの悲しみは私にどうすることも出来ないが、——それを癒やすのがお前の務めだが、ただお前は私を哀れな父と思ひ出さずともいい。

——ごらん、私は、晴々とした顔をしてゐるだらう。

彼女（再び顔を上げて老紳士を見る——凝結した表情——放心した大きな瞳）

無言。間。

老紳士（更に彼女に）この晴々とした私を覚えてゐておくれ。

世間の人を信じてはいけないよ——世間の人ね、お前のお父さんのことを——私をさ、氣がふれたやうに思つてゐるらしいのだが、それは嘘だよ。

私はただ、いつも私の世界に住んでゐるだけさ。だが、誰だつてさうではないか——ただ、大ていの人の世界はみんな似通うてゐる。私に開けた世界だけが、外の人のとは共通ではなかつた——自づと私は、外の人とは違つた考へ、違つて振舞ふだらうよ——それだけの事さ。

彼（呟き）——それにしてもあなたは、あまり不意に私どものところへお出でになつた……

老紳士 不意に？ さう不意に。あなたたちにはあまり不意に。だが、私にはほんたうに自然だつたのですよ。不意どころか、あなたたちが私を呼びよせたとしか思へないくらゐ自然だつた。彼——あなたは私たちの話を聞いていらしつたかとさへ思へるのです。

老紳士（彼に）さうなのですよ。（彼女に）全くだよ。今日だけではない。毎日。お前がたがこゝへ出る度ごとに——お前がたは私につけられてゐたやうなものだ。——お前がたがこの

土地にゐるといふことを知つて、私は一週間おくれでこゝへ來た。

お前がたがあそこに（右の手で右のうしろを指す）ゐるのを知つて、私はあそこ（左の手で左のうしろを指す）へ來た。

不氣味に思つてはいけない——お前がたはいつも私に見守られてゐたのだ、私の親ごゝろに。

——私はそれ程お前がたを見たかつたのだよ——楽しんでゐるお前がたはそれほど私の喜びであつた。

——そのお前がたと一緒に、ここへ、一度かうして腰をかけて見たいといふのが、ふとした私の願ひだつた。いつか、七年前にお前を學校へ見に行つた氣持のつづきだ。そのうちにその願ひは嵩じて來た——私はどうかしてお前に私のことを、お前の父のことを、眞當の父のことを言ひたいといふ切願が出た——夢に望んでゐたことを成し遂げたくなつた。その時は今より外にはないと思つた。——お前がたが外國へ行つてしまへば、私はその後で死ぬかも知れない。お前は私を知らないでしまふ。私はお前に知られないでしまふ。——さう思ふことが私には堪へられなかつた。

さうかと言つて、私はお前をおどろかせ悲しませるのをためらはずにはゐられなかつた。私はお前たちの末永い幸福を見究めただけで、それだけでもう満足して、私は今日、黙つてここを立去るつもりだつた。

その最後の時、今日が別れだと考へると、私の願ひは一番切なかつた——ここへ一度お前がた

と坐りたい、私がお前にとって何者であるか知らせたい。——その燃え上った私の切願が通じたのだ。

お前は、七年前の私の噂で、ここへ私を呼んだではないか——さうとしか、私には思へない。——お前と私とを引き合せたいといふ何者かがあつたのだらう。(彼に)あなたはいつれヴェニスへ行くでせうね？

彼 (あまりに唐突な話題に) え? ……

老紳士 この子をそこへつれて行つてやつて下さい。——あの美しい町で私は十年住んだ——あなたが外國へ行く人だといふ事があの男にだけの仕合ではない。(ポケットから手帳を出し、それを卓上に開いて書く) ここが、あの町の停車場だ。——ここがグラント・キャナル。それがかう曲つてゐるあたり——さう橋のある手前を、左へ曲る堀割に沿うて、曲るとすぐ右手に、——かういふ名のホテルがある。町の名も番地も書いて置く。私を十年住まはせたのはここだ。舟がすぐ玄関へつくよ。私のゐたのは表の三階で、水の上から見上げると左から五つ目の窓のある部屋さ——もう壁の色ぐらゐは變つてゐるかも知れないが。ヴェニスへ行つたら、あの部屋へ、すくなくともあの家へ留まつてくれ。三流ぐらゐの家ではあるが、古風でなつかしい。ベデカにも出てゐる。贅澤ではないが、宿屋になければならないもの——親切だけはあそこの誰も彼もたつぷり持ち合せてゐる。おやぢは——私より少し若いがあゝの頃、いつも地酒ノストランに酔ひすぎては(回想的に)帳場で神さんにきめつけられてゐたつけな。喧嘩の時でさへ仲のよさの

溢れてゐる夫婦だった。ふたりとも生粹のヴェニス人だった。

——さうさうあのおやぢは、まだこれくらゐ（床上三尺ぐらゐの高さを手で示して）のところに、ロシヤの文豪アントン・チエホフに頭を撫でられたことがあると言つてそれをよく自慢にしたものだが、一八九一年三月、アントン・チエホフといふ署名を大事にしまつてあつたつけ。——そこに娘がゐる。スザンナといふ名だ——もう大きくなつたらう。……よね子！

彼女（老紳士を見つめる——光つてゐる大きな瞳）

老紳士　スザンナはお前と同じ年だよ。よね子。私がどんなにお前を愛したか。それを知つてゐる世の中でたつた一人の人がスザンナだ。あの子はいつも私の膝に抱かれた——お前の身代りにね。あの子は私に一ばんなついた。一日中私の部屋にゐたものだ。よね子。私を生きさせてくれたのは、スザンナだった——お前の影だった。……私はスザンナにいつも何を話したと思ふ？　お前のことばかりだった。私はスザンナに言つたものだ——可愛いスザンナや、私にもお前と同じ年ごろの娘がひとりあるのだよつて。

——私はね、よね子、スザンナより外の人には今まで誰にもお前のことは言はなかつた——それがあの女、お前のお母さんとその夫とへの私の心づくしだった。——せめてスザンナひとりぐらゐには話さずにはゐられないぢやないか。

——スザンナは私に尋ねたよ。——小父さんの子は何といふ名だつて？　——私は答へやうがなかつた。

でも、よね子、私はお前の名さへ知らなかつたぢやないか——お前が生れたことは人づてに知れた。お前がよく育つてゐることもわかつた。それよりほかの事は何もわからなかつた——でも、私はもうお前のお母さんも私に無いくらゐなら、よその國で死なうと思ひ定めて日本を出てしまつたのは、お前が二つの時だつた。

スザンナはまた聞くのだ——小父さんは、なぜ、そんなに愛してゐる自分の子をここへ連れては來ないのだ？ つて。

私は抱いてゐるスザンナに言つた——スザンナや、お前はいい子だから今度からはもうその事は聞くのぢやないよ……

彼女（顔を上げて老紳士を見る。——凝視——一脈の表情——幼兒的恍惚）

老紳士 お前は！ お前はほんたうにお母さんそつくりぢやないか。

存分に泣いたあとであれが私を見上げた顔は、今のお前のその顔だ……（間）  
私は何を話しかけてゐたつけね？

彼女（幼兒的恍惚 幼兒的語調）スザンナ。

老紳士 さう——スザンナは私がそこを立つ時には、小父さんは私を置いて、自分の娘の方へ行くのかと言つて泣いた。あの子はあの時十三だつたが——あれは伶俐な子だつたよ。小父さんは自分の娘に會へるからうれしうせうとも言つた。私は首をふつてその子に會ひくとも果して會へるやら……——と答へるとスザンナは、どうして!? と不思議がつた。

私はその時返事をした——スザンナや、おとなにはおとなでなければ判らないことがある。お前がおとなになつた頃、小父さんはまた来て、そのわけを話して上げようよ……

これらの話の半ばより、廊下に

(ボーイ)

(自動車運転手)

(同じく助手)

いづれもそれぞれに金ボタン附の華かな制服を着て、右より相つづいて来る。機械的な動作。

再びすぐ左より、運転手と助手と、あまり大きくない一つの古トランクを二人して前後より持ち運び来る。そのうしろよりボーイ従ふ。トランクを運ぶ二人は右に去る。明るいバルコンに對してこの薄暗い廊下の動作はすべて影畫的である。

ボーイ (ケースメントの入口の片脇に、直立して) そちらにおいて御座いましたか。

老紳士 (ふりかへる——一種かがやかな顔) 何か。

ボーイ お仰せつけのお供がまゐりました。

老紳士 (時計を見るらしく) 汽車は何時だ。

ボーイ 三時二十五分で御座います。



老紳士 よし。(立ち上る)

ボーイ敬禮。再び左に行き、直ぐ手に洋傘とハンティングとを持って出て来る。右に去る。

老紳士 お前がたを私に會はせた何物かが、今もう私にお前がたと別れるやうに言ひつけるらしい。——さやうなら。——今別れなかつたら、いつ別れてよいやらわかるまい。——さよなら。

(卓上に残つたあつい手帳をとり、一枚裂いて、その斷片を) さあ、これを渡して置かう。

彼女 (受取る)

老紳士 よね子、——私には、スザンナはお前の分身のやうにさへ思はれるのだから……

(彼に) 自分のせみでない悲しみをもつたあなたの妻をあなたはもつと愛してやるでせうね。

(彼女に) よね子、さやうなら。

老紳士は彼等に背をむけてケースメントの方に輕快に、大股に、歩き出す。

彼女  
彼女  
彼 } (同時に立つ)

彼女 もうし……(幻に呼びかける人の聲、影。——七八歩ほど歩いた老紳士を呼びとめる)

老紳士 (ケースメントの中央に立ちどまり、彼等をふりかへつて) 私かい。

彼女 え! (凝視) ……あの、(うなだれて) ……何でも御座いません。(再び相手を凝視して) さよなら。

老紳士 (快活に) さよなら。——きつとヴェニスへおいで。お前がどんなに愛せられたかスザンナにお聞きよ。スザンナには何もかも話しておやり。私の約束だから。——さよなら。

老紳士 廊下より右へ立ち去る。——無雑作に。

間。——ピアノやむ。

彼と彼女と立つてゐる。——遠い物音を無心に聞くが如き表情。

彼 ……(呆然と立つてゐる自分と彼女とに気づいて) 今あなたはあの方をよびとめたね。

彼女 (呆然) え!

彼 何をいふつもりだったの? ——私も何かいふつもりだったが。

彼女 わたし……わたし、ともかくも、もう一度見て置きたかったの。

彼 あなたに何かおもひ當ることがある?

彼女 (大きくうなづく。彼の顔を見入つて、我に返る瞬間。一種鋭い明確な聲) ——わたし、妹たちとまるで氣質が違ふのです。

彼 …… (間)

彼女 (彼に近づきつつ) あなた。いつかヴェニスへつれて行って下さるわねえ。

彼 (やさしく) ああ、行かうよ! つれて行くとも! (彼女を軽く抱いて助る)

彼女 (愕然と) それにしても、あの方は、どちらへ立つておしまひになつたのでせう!?

彼 あなたに紙ぎれをくれたではないか。ちよつとお見せ。

彼女 (渡す)

彼 や。これやヴェニスの宿屋のことか。私はあの方の所書きだと思つてゐた。——所書ぐらゐは、何にしても、知つて置かなければなるまい。

急いで、老紳士を追ふ彼に、——

彼女 あなた! 行つてもう一度、お引きとめして下さい……

彼は彼女の言葉を聞かずに去つてしまふ。

彼女は彼を追はんとしてケースメントの上まで来る。

思ひ返したごとくまたもとの手すりのところに歸る。

彼女はその指に、さつき巻きつけてゐた毛糸を、そのまま未だしっかりと持つてゐる。

地面に落ちた毛糸のたまと、卓上の毛糸の束とからほどけた糸が、彼女の指から彼女の歩いたあとに糸になつて曳かれる。

彼女はバルコンの手すりに倚る。うなだれる。——考へてゐるやうである。さしぐんで來るやうでもある。彼女は、ふと、地面に落ちた毛糸のたまに目をとめたらしく、初めてそれに氣づき、しかし半意識的動作で、しづかにそれを片手で手繰り始めた……  
水平線に遠い船が通つてゐる。

——幕——

底本 現代日本戯曲選集 第5卷

著者 伊藤整 等編

出版者 白水社

出版年月日 1955

